

平成23年度 伊都国歴史博物館秋季特別展

『邪馬台国』を

支ええた国々

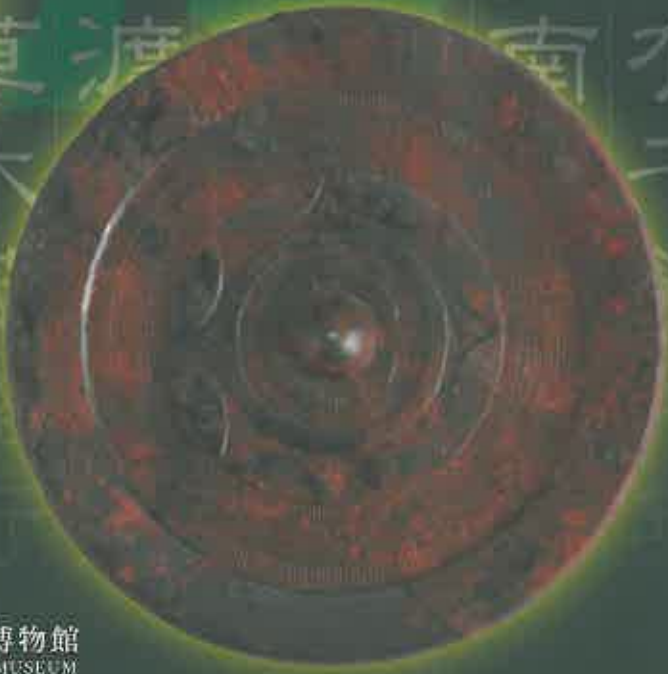
今使譯所通三十國

末盧國

有四千餘戸

伊都國

奴國



見本600円

ごあいさつ

『魏志倭人伝』に国名が記された三十国のうち、北部九州に位置する伊都国（糸島市、福岡市西区）、奴国（春日市、福岡市）では弥生時代の中期後半には王が出現し、他国を凌駕するほどの大国へと成長していきます。古代中国・魏の使者が見た両国は、まさに倭人の国々の中心的な国家であり、倭国の乱の後、邪馬台国の建国に大きな影響を及ぼした国として映ったことでしょう。

平成二三年度の特別展は、『邪馬台国』を支えた国々―今使譯所通三十國―と銘打ち、近年の考古資料によって卑弥呼を共立した国々を検証します。激動の時代を生きた北部九州の王たちに想いを馳せながら、邪馬台国の口マンに触れて頂ければ幸いです。

最後になりましたが、今特別展を開催するにあたり、ご理解ご尽力を賜り、多くの資料を提供して頂きました関係各位に厚くお礼申しあげます。

平成二三年一〇月八日

糸島市立伊都国歴史博物館 館長 柳原英夫

目次

I 邪馬台国の時代

1. 倭国の乱から卑弥呼共立まで
2. 今使譯所通三十國

1

II 卑弥呼を共立した北部九州の国々

1. 交易の国 ～対馬国と一支国～
2. 幻の王墓 ～末盧国と伊都国～
末盧国の王墓（桜馬場遺跡）
伊都国の王墓（井原縄溝遺跡）
3. 倭国をリードしたハイテク工場 ～奴国～
4. 大いなる塚 ～首長墓からみた邪馬台国時代の糟屋～
5. 伊都国の守り ～国境の集落 吉井水付遺跡 今宿五郎江遺跡～

8

III 北部九州の国々と他地域との交流

1. 玉作りに係わる交流 ～出雲と北部九州～
2. 青銅祭器の交流 ～巴形銅器～

30

IV 邪馬台国研究

1. まぼろしの斯馬国
2. 最新の邪馬台国研究

36

I 邪馬台国の時代

『倭人伝』の国々の風景／対馬国

「居るところ絶島、方四百余里、土地は山険しく深林多し、
道路は禽獣の徑のようである、千余戸有り。」

1 倭国の乱から卑弥呼共立まで



3-1 楼観[吉野ヶ里遺跡(左)と唐古・鍵遺跡(右)]

「其國本亦以男子爲王住七八十年
倭國亂相攻伐歷年」

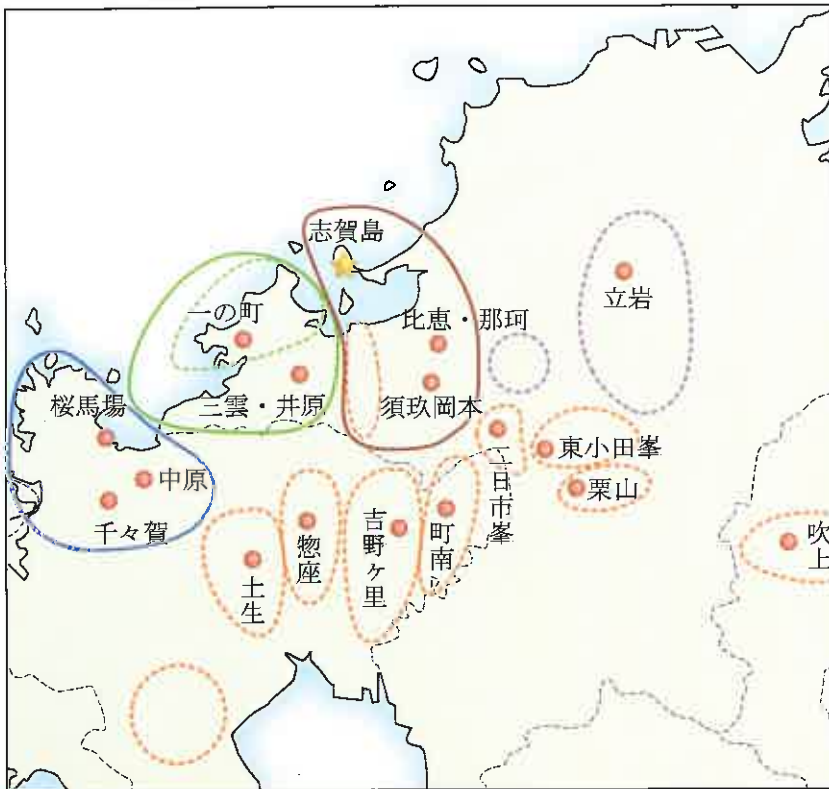
その国は元々男子を王としていたが、七、八十年で終わり、倭国は乱れお互いに攻撃し合うようになって何年かが過ぎた。二世紀後半に起こった倭国の乱を記した『魏志』倭人伝(以下「倭人伝」)の有名なくだりである。

中国の正史に倭国が登場するのは『後漢書』倭伝にある光武帝から倭奴国への金印下賜(紀元五七年)の外交記録が初見となる。また、倭国王の名が正式に紹介されたのは『後漢書』倭伝の帥升すいしょうが最初となる。倭国王・帥升については、男王であろうが、ここで言う「倭国」が「倭人伝」で言う倭国の乱と表現された国を指すものとする¹と帥升の系統が乱勃発まで続いていたことが考えられる。

男王系統が終わり、相い争う状況とはどういったものだったのか。「倭人伝」では詳細な記録は残されていないが、弥生時代後期の西日本の遺跡をみてみると、高台に居を構え、濠ほりや柵さくで防御を固め、鐵てつなどの武器を大量生産するなど断片的ではあるが、緊迫した状況を見出すことができる。

「乃共立一女子爲王名曰卑彌呼」

ひとりの女子を共に立て、王となす。名を卑弥呼という。数年間の内乱の後、女王・卑弥呼の共立により、邪馬台国の時代が幕を開けた。しかしながら、連合国家としての「新生倭国」が誕生した点以外、「倭人伝」の文言からは当時の社会構造を窺い知ることができない。



『魏志』倭人伝に記された30国のうち、対馬国、一支国、末盧国、伊都国、奴国以外は比定地が定まっていない。北部九州で確認されている多くの遺跡が倭人の国々に収まるのであろうか。

4-1 弥生時代における北部九州の主要遺跡



4-3 須玖岡本王墓



4-2 三雲南小路王墓

北部九州には三雲南小路遺跡(糸島市)、須玖岡本遺跡(春日市)、立岩遺跡(飯塚市)、東小田峯遺跡(筑前町)など、紀元一世紀頃に漢の皇帝より前漢鏡やガラス璧をはじめとする多くの文物を下賜された者たちがいる。彼らは『倭人伝』に記される国々の先代の王たちと考えられるが、後に強国となるはずのこれらの諸国が三世紀前半に一女子を共立せざるを得ない理由が単に倭国の乱だけであつたのかは疑問が残る。

『倭人伝』には、魏に使譯を使わしていた国々として三十ヶ国の名が列記されているが、対馬国から伊都国までの四ヶ国に限っては、その道程から地理的環境、人口を含めた社会構造などが他国よりも詳しく表記されている。このことは魏の使者が明らかに伊都国にまでは到達し、実際に見聞したことの表れではないかと考えられ、伊都国に設置されていた「一大率」に駐屯してその先には行っていないからではないかとする研究者も多い。

本展では、卑弥呼共立前後にあたる弥生時代後期にスポットを当て、『倭人伝』では読み取れない北部九州の国々の社会構造を検証してみたい。

II 卑弥呼を共立した北部九州の国々

『倭人伝』の国々の風景 / 末盧国

「四千余戸有り、山海にぞうで居り、草木茂盛し行くに前人が見えず。」

2 幻の王墓 〜末盧国と伊都国〜

末盧国の王墓(桜馬場遺跡)



14-1 唐津市遠景(●は桜馬場遺跡)

風光明媚な唐津市街。『魏志』倭人伝には末盧国の地形や風俗までもが描写されている。四千余りの家があり、山や海に濱って居住している。好んで魚介類を捕る。まさに今日と変わらない風土と言える。



14-3 唐津市の主要弥生遺跡



14-2 鉄戈と鉄矛(中原遺跡)

末盧国

「又渡一海千餘里至末盧國」

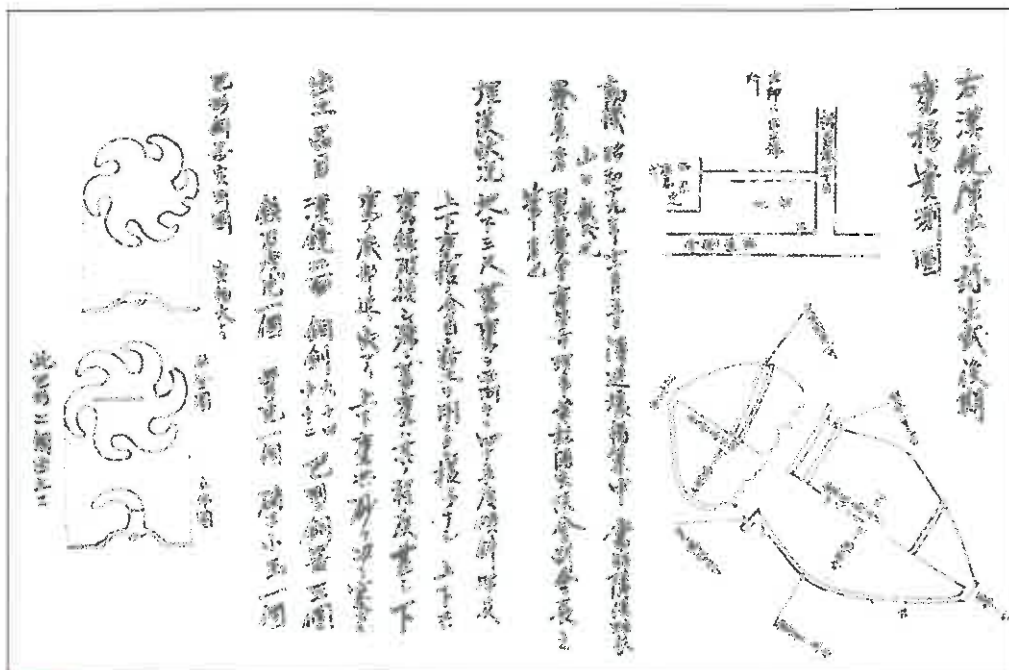
また、一海を渡ること千余里で末盧国に至る。魏の使いが最初に目にした九州本土の倭人の国である。

末盧国の領域は佐賀県北部、玄界灘に面した唐津市と東松浦郡の一部と考えられる。中心域は唐津市中央部の平野部であり、松浦川に沿って唐津湾沿岸部に形成される砂丘地帯に遺構が広がる。弥生時代早期、稲作の開始期より集落が営まれ、弥生時代中期前半には宇木汲田遺跡や柏崎遺跡といった複数の青銅器を保有する首長層が出現している。また、弥生時代後期における拠点集落としては平野最深部にあたる千々賀遺跡あたりが想定される。

末盧国王墓

太平洋戦争の戦火が激しくなった昭和一九(一九四四)年一月、唐津市桜馬場地区においても米軍からの空襲に対する避難場所として退避壕(防空壕)が作られることになり、同地の西岡氏宅の敷地内に計画された。

作業は同地の隣保班が中心となり堅坑掘りから開始されているが、地表から三尺の所で合せ口の甕棺を発見した。おびただしい副葬品の出土を見た隣保班長は正圓寺住職、龍溪顕亮氏に一報を入れ、松浦史談会副会長を務めていた同氏によって貴重な記録が残されることとなった。龍溪氏は数日間、現場



15-1 龍溪頭亮氏が記録した桜馬場遺跡出土状況覚え書(龍溪頭雄氏所蔵)



15-3 素文縁方格規矩洞文鏡(桜馬場遺跡)



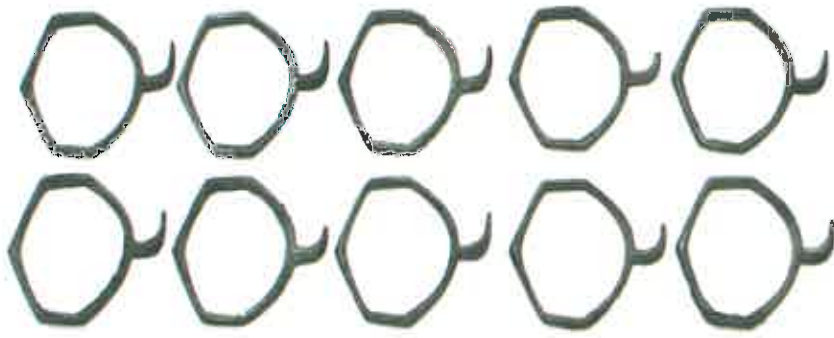
15-2 流雲文縁方格規矩四神鏡(桜馬場遺跡)

偶然とも言える昭和一九年の甕棺墓発見後、本格的な学術調査が行われたのは、昭和三〇(一九五五)年の日本考古学協会と東亜考古学会の合同調査からである。調査に際して明治大学教授杉原荘介氏は、「宝器類を収蔵していた甕棺がどのような形式の土器であろうか、そしてその墓地の様態とその弥生時代における時期がどの時期であろうか」との調査の命題を課していたが、新たな甕棺墓二基を発掘したものの宝器甕棺の実像に迫る成果は得られなかった。その後、甕棺自体が実見できぬままに多くの研究者が出土遺物から墓の時期を発表、「桜馬場式」という型式が設定されるなど北部九州における弥生時代後期の指標遺跡として重要視されていたが、甕棺形式に

に通い、詳細な見取図を作成した後、重要な副葬品は地権者の元に留め、甕棺は現地に埋め戻したとされる。また、出土状況の見取図や出土品などの貴重な記録を京都大学の塚本善隆博士を通じて梅原末治博士に伝え、その後、昭和二三(一九四八)年、奈良国立博物館で開催された「日本考古展」で出土品が展示公開されたことを契機に桜馬場遺跡が広く世に知られることとなった。

昭和一九年に出土した宝器は、龍溪氏の迅速な判断により散逸を免れ、現在、佐賀県立博物館に国重要文化財として保管されている。副葬品の内容を見ると、流雲文縁方格規矩四神鏡、素文縁方格規矩洞文鏡各一面、有鉤銅劍二六点、巴形銅器三点、鉄劍(片)一口、ガラス製管玉一点、ガラス製小玉一点とまさに末盧国王の墓に相応しいものであり、時期的には弥生時代後期前半に比定できる。また、棺内とは別にやや時期が下る内行花文鏡(片)一点と広形銅矛(片)一口も出土しており、付近に次代の王墓が存在する可能性も高い。

昭和一九年に出土した宝器は、龍溪氏の迅速な判断により散逸を免れ、現在、佐賀県立博物館に国重要文化財として保管されている。副葬品の内容を見ると、流雲文縁方格規矩四神鏡、素文縁方格規矩洞文鏡各一面、有鉤銅劍二六点、巴形銅器三点、鉄劍(片)一口、ガラス製管玉一点、ガラス製小玉一点とまさに末盧国王の墓に相応しいものであり、時期的には弥生時代後期前半に比定できる。また、棺内とは別にやや時期が下る内行花文鏡(片)一点と広形銅矛(片)一口も出土しており、付近に次代の王墓が存在する可能性も高い。



16-1 有鉤銅釧(桜馬場遺跡)



16-2 有鉤銅釧(桜馬場遺跡)



16-3 巴形銅器(桜馬場遺跡)

よる遺跡の時期決定が九州考古学界の大きな課題のひとつもなっていた。
平成五〜六（一九九三〜一九九四）年にかけて王墓周辺において唐津市教育委員会の調査が実施されたが、明確な遺構は検出されず、永く「幻の王墓」と呼ばれていた。

5 伊都国の守り く国境の集落 吉井水付遺跡 今宿五郎江遺跡

よしいみんつき



27-1 空からみた吉井水付遺跡
(背後の海は唐津湾)



27-3 出土したL字形石杵(吉井水付遺跡)



27-4 出土した青銅器や装身具(吉井水付遺跡)



27-2 丘陵斜面に建てられた竪穴住居

国々の守り

「倭人伝」には、卑弥呼が共立される前夜の国内の情勢を「その国、本男子を以て王となし、住ること七、八十年。倭国乱れ相攻伐する。」と記されている。「倭国大乱」とよばれ、二世紀後半の出来事とみられている。

当時の北部九州に、戦があつたことを示す資料は少ない。しかし、末盧、伊都、奴国などの国々の境では、ひとたび国の関係が悪化すれば、人々の出入りを規制する関所が設けられ、武力抗争に陥れば、最前線の砦が築かれたかもしれない。

伊都国は、西に末盧国、東には奴国と対峙していた。最近の調査では、これら周辺諸国との国境の管理や防御の機能を備えた集落が確認されている。

伊都国西端の関所 吉井水付遺跡

末盧国と伊都国との間には、脊振山系から伸びる急峻な山岳地帯が長さ一〇kmにわたり続いている。このため、地形的には両国の境界は明確ではない。

この区間の海岸線は断崖が多く、海伝いに陸路を進むことは難しい。両国間の陸路は南の脊振山系を越えて南に迂回し、玉島川沿いに通行していた可能性が高い。

脊振越えの峠で有力視されるのが十坊山(標高五三五m)東の白木峠越えルートで、この登り口に位置するのが吉井水付遺跡である。

遺跡は、標高二六・七mを頂とする丘陵上に立地、北は唐津湾の眺望がよく、南は白木峠越えルートをのぞむことができる。

丘陵斜面から弥生時代後期の竪穴住居が検出され、集落の規模はせいぜい一〇〇m四方と小規模であ

28-1 今宿五郎江遺跡の環濠



28-2 環濠の断面(今宿五郎江遺跡)



28-3 国境の農具(今宿五郎江遺跡)

頭部が丸く加工されており、福岡平野の影響を受けた農具である。



28-4 あん(今宿五郎江遺跡)



28-5 貨泉(今宿五郎江遺跡)



28-8 木鏃(今宿五郎江遺跡)



28-6 短甲(今宿五郎江遺跡)



28-7 鉄刀柄(今宿五郎江遺跡)

伊都国東の砦 今宿五郎江遺跡

るにもかかわらず、銅鏡片、銅鋤先、滑石製勾玉、ガラス玉などが出土した。前面に広がる海を舞台に交易に従事するとともに、伊都国西端の関所、見張台的な役割も併せ持っていたのではなからうか。

今宿五郎江遺跡は、福岡市西区今宿に位置する弥生時代中期～古墳時代初頭の集落遺跡である。これまで、一〇次にわたる調査が行われ、多くの遺構、遺物が出土し、伊都国東部における拠点集落であることが明らかとなった。

この集落の最大の特徴は、東西二〇〇m、南北二七〇mの範囲を幅三m、深さ一・五mほどの環濠が集落を囲むことである。環濠は弥生時代中期後半に成立し、後期になるとその規模が拡大したが、終末期にはその役目を終え埋没したと考えられている。

意外とも思えるが、伊都国では環濠が巡る唯一の集落なのである。

海に近い立地環境と大陸・朝鮮半島系文物が多く出土していることから、玄界灘を舞台とした対外交易に注目が集まっているが、武器、武具が多く出土していることも見逃せないだろう。環濠内からは木製の短甲や楯が出土したほか、集落内から三〇本ほどの銅鏃が出土している。北部九州において、単一の弥生集落から出土する銅鏃の量としては、原の辻遺跡に次ぐ多さであり、集落の防御機能が重視されていたことを窺わせる。集落の周囲に環濠が掘削された理由とも無縁ではなからう。

遺跡の東一・五kmには、福岡平野と糸島平野を結ぶ陸路の要衝、広石峠が立地する。今宿五郎江遺跡はまさに伊都国と奴国の国境に位置する集落なのである。

平成23年度 伊都国歴史博物館秋季特別展
『邪馬台国』を支えた国々
いましえきつうずるところさんじゅっこく
～今使譯所通三十國～

発行日 平成23年10月8日

編集発行 糸島市立伊都国歴史博物館

〒819-1582

福岡県糸島市井原916

TEL 092-322-7083

FAX 092-321-9155

Email: itokoku-museum@mist.ocn.ne.jp

URL: <http://www.city.itoshima.lg.jp/soshiki/33/hakubutsukan.html>

印刷 株式会社ディスジャパン

倭人傳

人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百
國漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至
循海岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪
國七千餘里始度一海千餘里至對海國其大
曰卑狗副曰卑奴毋離所居絕島方可四百餘